

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 宮内 泰介

本論文は、ソロモン諸島マライタ島アノケロ村を事例に、いわゆる「発展途上国」の村落に生きる住民が、いかなる資源（リソース）をもとに生活戦略を組み立てているのかを、1992年以來継続してきたフィールドワークをもとに論じた研究である。著者の視点は開発社会学の議論を批判的に整理しながら、人間開発・社会開発論が目指した「社会的なもの」の多様な役割や機能を、具体的な生活の歴史的事実のなかで分析していくという点に特徴がある。

第1章において、調査地であるソロモン諸島社会の位置や特色を概説したあと、「実生活経済」論や「包括経済モデル」など既存の説明枠組みを検討しながら、生活を支える資源に注目する筆者の立場を位置づけ、フィールドワークという方法を採用する意味について論ずる。第2章では、国家単位の政治史とは異なる、村の歴史を浮かびあがらせる論点として、海岸部への移住、戦争と反イギリスの自治運動（マアシナルール）、キリスト教への改宗と学校教育、出稼ぎと移住、道路と消費物資などが取り上げられ、生活の領域に焦点があてられる。第3章では「半栽培」が、サブシステム（非貨幣経済）領域の資源や労働時間を分析する枠組みとして登場し、ガリやサゴヤシ、パンダナス、アマウなど半栽培植物の利用実態を分析しながら、「半栽培」が歴史的であると同時に、人と自然との共時的な相互作用を支える仕組みであることを明らかにしている。それを受けて第4章において、「半栽培」の厚みを支える社会的な空間所有のありかたとして、土地所有と土地利用の実態を分析して、「重層的コモンズ」と呼ぶべき認識を導きだし、第5章と第6章では、個人史のヒアリングを素材に「出稼ぎ」や「移住」や「避難」という移動に光をあてながら、村における資源の歴史的ストックの意味を分析していく。民族紛争という「有事」のなかでの移動や、避難の諸類型を押さえることで、生活戦略の多様性と連続の様相が浮かびあがる。そして第7章では、近年の新たな内陸部への移住計画とその担い手を分析するなかで、複合的な生活戦略の新しいバージョンを、サブシステム部門をもちながら貨幣経済部門ともつきあう「二重戦略」として概念化し、「重層的コモンズ」の所有・利用の慣習と重ねあわせて理解できる視点を提示している。

筆者は「発展」や「自然保護」や「自立」の観念のもとで、住民の感じているリアリティや迷いを切り捨ててしまうような開発社会学ではなく、その生活が依存しているさまざまな「社会的なもの」の再発見や再評価を、彼らと協働して行いうる社会学の立場を模索している。更なる理論的な洗練は今後に期待されるところだが、調査地で長期にわたる信頼関係を築き、ヒアリング調査や観察実践を積み重ね、住民の生活感覚や意識の内側から「生活戦略」を支える「コモンズ」の複合的なありようを描き出した本論文は、その一つの成果である。本審査委員会は、博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。